

松浦羊言

一八八五—一九三一



篆刻家松浦羊言（本名・土橋善平）は、明治一八年（一八八五）五月二十四日、山梨県南巨摩郡飯富村（現在・中富町飯富）、父・土橋源右衛門、母・さた（旧姓・内藤）の五男二女の七番目として生まれた。

父は、村では土地持ちであったが、山間地での大家族生活は厳しく、一里もある山頂の畑に肥桶をかつぎあげたという。また、母は稀に見る理論家で、子供の躰には一段と厳しかった人のようである。

一男の吾甫は、十四・五才にして論語・孟子・中庸などを写し取り、漢詩もよくした人で、農協会長・助役・村長を務めた。二男の太三郎は大工で豪気であった。忙しい時には弟子達に「片方の目で眠り、片方の目で仕事をしろ」と怒鳴ったというほどで、弟子達の中から多くの名工が輩出した。三男の登一郎は、若い時単身米国に密航したが途中帰され、後に国鉄に勤務し東京で各駅の駅長を努めた。四男の要馬は秀才で医師。中巨摩郡鏡中条で内科・産婦人科「至誠堂」を開院した。書を相沢春洋に師事、号を「釜川」という書家でもあった。早くに山梨書道会々員となる。弟・羊言逝去後、その作品を国内外より集め羊言印譜を刊行、会員に無償配布するなど貢献した。昭和二十八年十月三十日、七十三歳にして歿した。遺骨を鏡中条名利長遠寺に葬り、法号仁術院釜川日要居士という。

五男羊言の少年期は豪胆で賭博を好んだ。ある時身の廻りの物を悉く剥がされ、裸で家へ逃げ帰った折、母に打擲折檻された。その時自分の愚かさを悟り、決意して自分の小指を自ら鉈なたで切り落とし『鉄腸石心』の文字を書いて改心し、以来篆刻に精進するようになった。

明治三十七年（一九〇四）一月、信州（小県郡和村）ちいさかたぐのうむらで修行中の羊言に、兄・登一郎から次のような激励文が届いている。『天寒く地凍る氷雪の風に凌ぎ難く、時節我地方とは違い、身体の健康ならん事を専念す。汝一寸の光陰を軽んずべからず。昼篆刻に練熟せよ。夜は学問に勉強せよ。国務として寸時も止むべからず。今日の悲しみ、何時語り合う時有らん。男子志を立て郷関を出ず。若し業ならずんば死しても帰らずとか云う

斑竹半簾惟我道心清似水



看華宮故人



金敦熙印

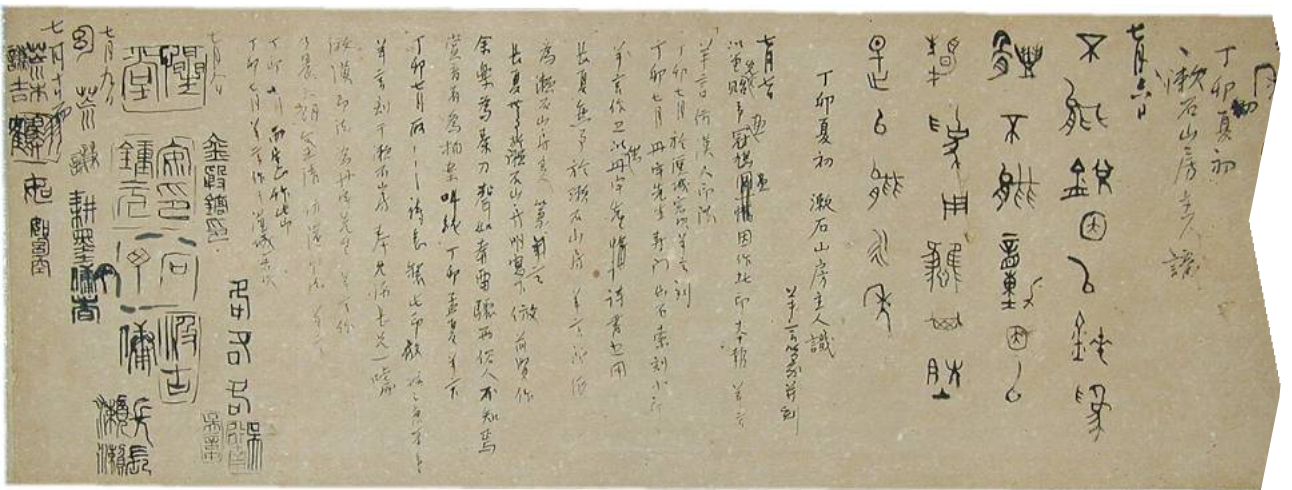


惺堂





上部拡大



气浩々



(800×2600×50)

心曠得天真



(330×975×32)

鐸·戈



(430×355×30)